

1955年のエドゥアール・グリッサン ——批評記事「呪いの継承」を中心に——

Édouard Glissant in 1955: Around the Critical Article “L’héritage de la malédiction (Inheritance of the Curse)”

早川 卓亜
HAYAKAWA Takua

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 ジュニア・フェロー
Tokyo University of Foreign Studies, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Junior Research Fellow

著者抄録

〈関係〉や〈全-世界〉等の思想によって、出身地マルティニークを起点としつつ現代世界全体を視野に収めた独自の世界認識を提示した、カリブ海のフランス語圏文学を代表する作家の一人、エドゥアール・グリッサン。本論文では、その1955年の仕事（同年に発表した、あるいは執筆したと思われる著作）に注目し、特にグリッサン初の批評記事であるアルチュール・ランボー論とそれを踏まえた現代詩論「呪いの継承」を読解してゆく。同記事を読むことで主に示されるのは、そこに当時のグリッサンの詩学の要諦（「詩的認識」と「瞬間から持続への移行」）が凝縮されていること、そして、「〈関係〉の詩学」と〈全-世界〉という後年のグリッサン思想の中心的概念の萌芽が見出されることである。こうした読解と1940年代後半から1960年代前半に至るグリッサン文学の展開とを踏まえると、1955年を作家グリッサンの初期における一つの画期とみなすことができる。

Summary

With respect to Édouard Glissant, one of the most important writers from Caribbean Francophone literature, we will here interest ourselves in his works published or written in 1955, and especially will read in detail his first critical article “L’héritage de la malédiction (Inheritance of the Curse)” which discusses Arthur Rimbaud and contemporary poetry (of Glissant’s time). Through this detailed reading of the critical article, we will see what was poetically at stake for the Martinican writer at that time (that is to say poetic knowledge and transition from instant to duration) and will find germinal signs of the “poetics of Relation” and “le Tout-Monde (the Whole-World)”, central concepts of his thought developed in later years, around 1990s. Taking into consideration this reading and the evolution of the glissantian literature from late 1940s to early 1960s, we will understand that the year 1955 was an important turning point in Glissant’s initial literary career.

キーワード

アルチュール・ランボー 詩的認識 瞬間と持続 〈関係〉 〈全-世界〉

Keywords

Arthur Rimbaud; poetic knowledge; instant and duration; Relation; the Whole-World

原稿受理日：2022.11.3.

Quadrante, No.25 (2023), pp.87–101.

目次

はじめに

0. 「呪いの継承」の位置づけと構成

1-1. 「呪いの継承」第Ⅰ節：西洋における詩と哲学
の関係（古代から16世紀頃まで）

1-2. 「呪いの継承」第Ⅱ節第1段落：西洋にお
ける詩と哲学の関係（17世紀から19世紀）

2. 「呪いの継承」第Ⅱ節第2・3段落：ランボーの
「呪い」と「詩的認識」

3. 「呪いの継承」第Ⅲ節：現代詩における「詩的
認識」

4-1. 「回折」と「炸裂」：「〈関係〉の詩学」への道筋
4-2. 詩の抱える桁外れの対象：〈全-世界〉への道筋
結論



はじめに

「アンティル性(カリブ海性) antillanité」、「〈関係〉Relation」、「クレオール化 créolisation」、「〈全-世界〉Tout-Monde」などの鍵語に代表される思想によって、出身地マルティニークを起点としつつ文化の接触と混交が急激に進む現代世界全体を視野に収めた独自の世界認識を提示した、カリブ海のフランス語圏文学を代表する作家の一人、エドゥアール・グリッサン(Édouard Glissant, 1928-2011)。本論文では、若き日のグリッサンが初めて発表した文芸批評記事「呪いの継承 L'héritage de la malédiction」を中心に、この作家の1955年の仕事に注目する。まずは1960年代前半までのグリッサンの経歴を略述し¹、1955年という年の大まかな位置づけを示そう。

小アンティル諸島のフランス領マルティニーク島に生まれたグリッサンは、リセ(中高等学校)²卒業まで同島で育ち、1946年奨学金を得てパリへ渡った。ソルボンヌ(パリ大学文学部)で哲学を学びつつ、作家として身を立てるべく詩作に取り組み、『レ・タン・モデルヌ(現代) *Les Temps modernes*』など複数の雑誌に詩を発表した後、1953年最初の著書である詩作品『島々の野 *Un Champ d'îles*』を出版する。1954年には雑誌『新文芸 *Les Lettres nouvelles*』に短い書評が掲載され、以降同誌を中心に文芸批評も発表してゆく。1955年には「呪いの継承」等の雑誌記事とともに2

冊目の著書である詩集『揺らぎの地 *La Terre inquiète*』を出版した。1956年は多くの批評・書評記事に加え、叙事的長編詩『インド *Les Indes*』と、散文と詩が並置されたエッセー(随想)『意識の太陽 *Soleil de la conscience*』が刊行された。1958年出版の小説第1作『レザルド川 *La Lézarde*』はフランスでルノー(Renaudot)賞を受賞した。1960年には叙事的長編詩『黒い塩 *Le Sel noir*』を、1961年に詩集『釘づけられた血 *Le Sang rivé*』と戯曲『ムシュー・トゥーサン *Monsieur Toussaint*』を出版、1964年刊の小説第2作『第四世紀 *Le Quatrième siècle*』はスイスでシャルル・ヴェイヨン(Charles Veillon)賞を受賞した。このように、詩人として出発したグリッサンは、1950年代半ばから文芸批評を発表し始め、次いでエッセーや小説、戯曲も著して著作のジャンルを広げてゆき、1960年代前半には作家としての地位を確立した³。

作家活動と同時に、グリッサンは同時代のアフリカ・カリブ海の文化・政治運動にも積極的に参加した。セネガル出身のアリウン・ジョップ(Alioune Diop)らは1947年に雑誌『プレゼンス・アフリケーヌ *Présence Africaine*』を創刊し同名の出版社を設立、1956年にパリで、1959年にローマで黒人作家芸術家国際会議(Congrès international des écrivains et artistes noirs)を開催したが、グリッサンはこの二度の会議に出席した。1960年には「アルジェ

¹ 略歴をまとめるにあたり、次の五つの文献を参照した。ダニエル・ラドフォールの入門書『エドゥアール・グリッサン』の「風景 *Le paysage*」の章 [Radford 1982: 11-27]、アラン・ボドーによるグリッサンの著作と関連文献の注解付き目録 [Baudot 1993]、ジャン＝ルイ・ジュベールによる入門書に付された「年譜 *Repères biographiques*」 [Joubert 2005: 76-80]、中村隆之のグリッサン論『エドゥアール・グリッサン——〈全-世界〉のヴィジョン』 [中村 2016]、フランソワ・ヌーデルマンによる伝記『エドゥアール・グリッサン——寛容なアイデンティティ』 [Noudelmann 2018]。

² グリッサンはマルティニーク第一の都市フォール＝ド＝フランスのリセ・シェルシェール (lycée Schoelcher) で奨学生として学んだ。同校で教えていたネグリチュード (négritude 黒人意識) の詩人エメ・セゼール (Aimé Césaire) らが発行していた雑誌『トロピック(熱帯) *Tropiques*』 (1941-1945) を熱心に読むなど、教師や友人との関わりの中で、文学や哲学の素養を身につけた。

³ 後で詳しく論じるが、当時のグリッサンの詩風の変化に触れると、『揺らぎの地』(1955)まではほぼ全ての詩がカリブ海の風景を題材としているが、『インド』(1956)と『黒い塩』(1960)はカリブ海の歴史などを扱った叙事的作品である(1961年刊の『釘づけられた血』は1940年代後半から1961年までに書かれた様々な内容の詩編を集めたもので、やはりカリブ海の風景が主な題材である)。風景から歴史へという詩の主題の移行の点でも、他ジャンルへの取り組みという点でも、グリッサンの作風は1955年前後に変化が生じている。

リア戦争における不服従の権利についての宣言」(いわゆる「121人宣言 Manifeste des 121」)に署名した。1961年にはグアドループ、マルティニーク、仏領ギアナの自治(もしくは独立)を求め同郷の知識人と「アンティル＝ギアナ戦線 Front antillo-guyanais」を結成した⁴。

以上を踏まえると、1955年は、1950年代後半から1960年代前半の文筆と文化・政治運動にわたる旺盛な活動期に入ってゆく、いわば助走の年としてひとまず見なすことができるだろう。本論文では主に、1955年に発表された、または書かれたと思われるグリッサンの著作⁵の中で、初の批評記事である「呪いの継承」を読解してゆく。この記事は原文で6ページという比較的短い文章だが、そこには当時のグリッサン文学の展開が凝縮されており、さらに、「〈関係〉の詩学」と「〈全-世界〉」という後年のグリッサン思想における中心的概念の萌芽も見出すことができる⁶。

0. 「呪いの継承」の位置づけと構成

「呪いの継承 L'héritage de la malédiction」⁷は『シュールレアリスムの歴史 *Histoire du*

surréalisme』(1945)等で知られる批評家モリス・ナドー(Maurice Nadeau)が主宰した雑誌『新文芸 *Les Lettres nouvelles*』の第28号(1955年6月)に掲載された。後に変更を加えられ、詩論を中心とする評論集『詩的意図 *L'Intention poétique*』(1969)に収められる⁸。

記事は5節からなる。第I節では古代ギリシアから16世紀頃まで、西洋における詩と哲学の関係が凝縮してたどられる。第II節では、まず、第I節を承けて17世紀から19世紀に至る西洋の詩と哲学の関係が示され、次いでその流れを踏まえたアルチュール・ランボー(Arthur Rimbaud, 1854-1891)論が展開される。第III節では現代詩についてのグリッサンの見解が述べられる。第IV節は第III節の補足、第V節は結びの言葉である。本論文では第I、II、III節を取り上げる。

1-1. 「呪いの継承」第I節：西洋における詩と哲学の関係(古代から16世紀頃まで)

〈詩の女神〉la Muse⁹の存在は、私にはずっと、詩人への侮辱のように思われてきた。

⁴ しかし、この組織は直ちに解散を命じられ、グリッサン自身はカリブ海のフランス領からの退去と本土外への渡航禁止という処分を受けた。グリッサンがマルティニークに帰郷するのは1965年のことである。

⁵ ボドーの注解付きグリッサン書誌によると[Baudot 1993: 9-12]、1955年に発表した著作は、「呪いの継承」と『揺らぎの地』の他、3本の書評、二つの詩編、そしてヴィクトル・セガレン(Victor Segalen)を論じた批評記事「セガレン、セガレン!」である。また、同じくボドーによれば[Baudot 1993: 14, 20]、1956年刊の『意識の太陽』と『インド』には執筆時期と思われる日付としてそれぞれ「1955年3月から4月」「1955年4・5・6月」と記されている。

⁶ 筆者の知る限り、本論文の他にこの批評記事を取り上げた研究は、ジャンヌ・ジェグーソの「止揚のエクリチュール——文芸批評家としてのエドゥアール・グリッサン」[Jégoussou 2020]のみである。ジェグーソはグリッサンが1950年代に発表した複数の批評記事を読解し、ヘーゲル弁証法の「止揚 *dépassement* (ドイツ語 *Aufhebung*)」をそれらに共通する観点として取り出して初期グリッサンの文学論の形成過程を素描しているが、多くの著作をたどってゆく同論文の性質もあり、個別の著作の読解はやや厚みに欠ける。「呪いの継承」についても止揚という観点に関わる部分のみ(記事の3分の1程度)を分析している。本論文ではジェグーソ論文で行われていない「呪いの継承」の全体的な読解を試み、「止揚」以外の重要な論点を指摘してゆく。

また、近年、雑誌記事やフランス国立図書館等が所蔵する草稿や手稿など、書籍として刊行された作品以外の著作に注目してグリッサン文学の展開をより精緻にたどろうとする仕事が増えてきており、ジェグーソ論文と同じ論集に収められたアクセル・アルテロンとラファエル・ロロの共著論文(草稿や手稿を扱っている)[Arthéron et Lauro 2020]やグリッサンの初期詩編「基本元素 *Éléments*」を版による異同を踏まえて読解した廣田郷士の「基本元素の考古学」[廣田 2020]はその好例である。本論文もこうした研究動向の中に位置づけられる。

⁷ 以下、この批評記事から引用する際は HM と略記する。

⁸ 「はじめに」でも触れた通り、1953年まで詩のみを発表していたグリッサンは、1954年以降『新文芸』誌を中心に書評や批評等も発表してゆく。『詩的意図』の多くの文章は1950年代に雑誌に掲載された批評記事がもとになっている。

⁹ 以下、外国語から訳して引用する際、理解を助けられる場合はこのように原文を補う。la Muse、la Nature、l'Autreのように大文字で始まる一般名詞は〈〉を付して訳す。また、すでに翻訳がある場合はそちらも参照しつつ、必要に応じて文脈に合わせ新たに訳した。

なぜ詩人に考えるためのお嬢さん *une miss à penser* が必要なのか、と私は叫んでいた——だが、まさにそれこそが〈詩の女神〉にかつて認められていた役目なのだ。つまり、詩人の思考、息を吹き込む女性であること。[HM: 824 (傍点は引用者)]

「呪いの継承」の書き出しである。これに続いてプラトンへの言及がなされることから、上の引用は、すぐれた詩人が文芸を司る女神から靈感を授かり（神気を吹き込まれ）、詩を作るという古代ギリシアの（そして、それ以来の西洋の伝統的な）詩人・詩作観に対する否定的見解であろう。つまり、グリッサンは詩作においてインスピレーションの果たす役割を認めない、あるいは少なくとも、重んじないという立場をとっている。後で詳しく論じるが、この批評記事をはじめ1955年頃のグリッサンは詩の方向性として「瞬間から持続への移行」を標榜しており、詩の女神がもたらすインスピレーションも、瞬間的なひらめきとして斥けられていると思われる。また、こうしたインスピレーションの否定ないし軽視は、裏を返せば、詩作の技術、技巧の重視を意味すると筆者は考えるが、この観点と1940年代半ばから1960年代前半の詩風の大きな変化（これも後で詳述する）とを考え合わせると、グリッサンが詩の手法や形式について高い意識を持っていたことがうかがえる。

さて、上の引用に続いてグリッサンは、プラトンの『国家』第10巻で展開されるいわゆる「詩人追放論」に触れ、古代ギリシアにさかのぼる西洋における詩と哲学の断絶を指摘する。

プラトンは〈都市国家〉から詩人たちを追放した、だがそれがどうしたと言うのか？ 彼らは感性の、想像力の、雅趣の、限りない領域を確保しており、そこでは誰も彼らに難癖をつけることができなかった。かく

して、人は、抒情的、繊細、言葉が巧み（詩の才能は様式上の達成に、心理や描写の豊かさにかかっていた）であるか、それに対して、独断的、体系的、思考者であるか、であった。[HM: 824]

そして、西洋はキリスト教と様々な哲学の支配のもとで存続したが、その中で、人間を孤立させ、人間を自らへと閉じ込めるという策動がなされてきた、とグリッサンは述べる——ここでは、人間をひたすら内面に向かわせる（換言すれば、他者や世界との関わりから隔てる）個人主義が問題視されている——。また、引用にあるように、詩人は言葉や抒情性の洗練といった詩という枠組みの内側での完成と人間の内面の表現とを事としていたが、グリッサンによれば、そうした中でも、詩は、おぼろげにはあったが、世界の開示（révélation）へと向かってゆくことを定められていた。このように「詩と世界」という「呪いの継承」の重要なテーマの一つが示唆される。世界の開示へ向かう詩のあり方は次のようにも敷衍されている——「詩は自らを完成するにつれて、自らを否認していた」、「ロンサールはロンサールを超えていた」[HM: 824]。ここでグリッサンが論じているのは、詩が自らの内部では完結できず、詩人も内面をうたうことのみには留まらず、外に広がる世界との関わりを叙するようになってゆく、ということだと筆者は考える。また、上に引いた通り、節の終わり近くでロンサール（Pierre de Ronsard, 1524-1585）が登場し、時代としては古代から16世紀頃まで経過したことがわかる。

1-2. 「呪いの継承」第Ⅱ節第1段落：西洋における詩と哲学の関係（17世紀から19世紀）

3段落からなる第Ⅱ節の第1段落では、第Ⅰ節の古代から16世紀頃までの時代の流れを承けて、17世紀から19世紀頃の詩と哲学の関

係について、次のように述べられる。

西洋の人間は、新しい地理空間を支配・同化し、近代科学の大いなる探究を始めていたとき、一般観念をお払い箱にして、バークリー[George Berkeley, 1685-1753 (引用者注)]のリンゴをかじっていた。そのとき、哲学者と詩人との間はまだだったが、哲学と詩との、つまり、世界の構想 la conception du monde と世界の共同-出生 co-naissance (すでに古典となった用語に拠った)との、距離が縮まりつつあった。思想と生のこうした全般的な動きの全てが、ひそかに「詩的認識 connaissance poétique」の企てを可能にしていた。[HM: 825]

17世紀から18世紀にかけては、スペインとポルトガルに代わってイギリス、オランダ、フランスが世界各地で植民地化を進めた。また、この時代にケプラー、ガリレイ、ニュートンらによって天文学や物理学等の自然科学が大きく発展したのも周知の通りである。「一般観念をお払い箱にして、バークリーのリンゴをかじっていた」とは、バークリー哲学の基本テーゼ「存在するとは知覚されること *esse is percipi*」を踏まえた言葉だと考えられる¹⁰。「すでに古典となった用語」とされている「共同-出生 co-naissance」は、ポール・クローデルが『詩法 *Art poétique*』(1907)の第2部「世界への共同-出生と自己の認識についての論説 *Traité de la connaissance au monde et de soi-même*」で提出した造語である。クローデルは *connaissance*

(知識、認識)の語が「共に」を意味する接頭辞 *co-* と *naissance* (誕生)の語からできている、と独自に解釈し、「共に生まれること」と「認識」の二重の意味を帯びた *co-naissance* の語を造り出した¹¹。引用の終わりの「詩的認識」には、世界へと出生し、世界の中で自己を認識するという「共同-出生」としての含意があると考えられる。

また、上の引用と前後するが、第II節第1段落冒頭では、同節の議論の中心である19世紀の詩人ランボーについて、マルティニーク出身の詩人エメ・セゼールの言葉が引かれている。

ランボーはまさに、こうした復活 *une telle renaissance* の模範的な為し手だった。私はここで、エメ・セゼールの言葉を思い起こす。「ランボーは、郷愁を覚えるほど、苦悶を覚えるほどに、エネルギーを帯びた諸力に関する近代の考えを実感した最初の人だ。この諸力は物質の中でひそかに我々の静穏をうかがっている」[HM: 825]

最初の文の「こうした復活」とは、第I節から第II節第1段落までのグリッサンの論旨を踏まえると、古代ギリシア以来断絶していた詩と哲学の距離が近代に入り縮まっていったという状況のことだと思われる。斜体で記されたセゼールの言葉は1944年に彼がハイチで行った講演「詩と認識 *Poésie et connaissance*」からの引用である。この講演はマルティニークで発行されていた文芸誌『トロピック』に抄録されており[Césaire 1945]、グリッサンはリセ時代にこの

¹⁰ 『人知原理論 *A Treatise concerning the Principles of Human Knowledge*』(1710)には「ある色、味、におい、形そして硬さが相伴うのが観察されると、それらは特定の事物とみなされ、リンゴという名前によって表示される」[Berkeley [1710] 1949=2018: 54]という例が挙げられている。リンゴを手にとってかじることで、五感が相伴って働き対象が知覚され、その存在が認識されるということである。

¹¹ よく知られている「論説」の冒頭を引こう。「我々はひとりでは生まれない。生まれることは、あらゆるものにとって、共に生まれること *co-naître* [*co-naissance* の動詞形]である。あらゆる出生は一つの認識である。」[C Claudel [1907] 1984: 66 (邦訳: 174)]

文章を読んだと考えられる¹²。講演でセゼールは実験と観察に基づく実証的な「科学的認識 *connaissance scientifique*」を「貧しく、飢えている」と断じ、これに対して「詩的認識」を擁護し、ボードレー、ランボー、マラルメ、ブルトンに言及しながら自らの詩論を展開している。グリッサンは「呪いの継承」で「詩的認識」を軸として議論を展開してゆくが、この着想には、少なくとも源流の一つとして、セゼールの詩論があると言えるだろう。

ランボーを先駆とする「詩的認識」の試みへと至る17世紀から19世紀までの詩と哲学の関係を凝縮してたどった第Ⅱ節第1段落だが、その末尾には「しかし、呪いが存在した」という一文が置かれ、記事の題に入っている「呪い *malédiction*」の語が初めて登場する[HM: 825]。同節第2、第3段落ではこの「呪い」を抱えた詩人としてのランボーをめぐる議論が展開される。

2. 「呪いの継承」第Ⅱ節第2・3段落：ランボーの「呪い」と「詩的認識」

第Ⅱ節第2段落の初めでは、ランボーが抱えていたとされる「呪い」は次のように規定される。

私が、呪い、と呼びたいのは、ここでは、詩人につきまとう孤独ではなく、自らの芸術によって詩人が運命づけられた悲惨でもなく、次のような矛盾である——他者と世

界の全的把持 *une prise totale* へと向かいながら、同時に、ある種の、いわば内奥 *intimité* に、ますます鋭敏に耳を傾ける、という矛盾。[HM: 825]

まず、ヴェルレーヌが「呪われた詩人 *poète maudit*」という言葉で表現したような、不遇の孤独の中で悲惨な人生を送る詩人、という「呪い」のあり方は否定されている。グリッサンにとって、ランボーの「呪い」とは、自己の外部（他者と世界）と内部（内奥、内面）の両方に向かう、という矛盾である。さらに、他にも様々な矛盾が挙げられており、そのいくつかを引くと——「ランボーの芸術は、まだ潜在する諸傾向を照らそうとしていた」、「彼は世界の詩人 *poète du monde* だったが、心理的あるいは描写的な詩¹³の残余と共にあった」、「彼は「〈全〉*Tout*」を求めていたが、それは個人主義の重荷を引きずりながらだった」[HM: 826]。ランボーは、世界の詩人、世界との関係の詩人として先駆けていたが、哲学と断絶し、人間をひたすら内面に向かわせる（つまり個人主義的な）旧来の詩の傾向も抱えていた。そして第2段落の終わりで、グリッサンはこのように記す。

ランボーの呪いとは、これらの矛盾すべてを生きることだった。雷に打たれながら詩の行く先を照らした人、ランボーが、多くの後継者に遺贈することになったのは、ついに組織された詩的認識という彼の抱

¹² セゼールのこの講演は、1955年の時点では『トロピック』所収の抄も含め3度出版されており、版による異同がある。このため、どの版をグリッサンが読んだのか、という問題があるが、1956年にグリッサンが発表するセゼール論「エメ・セゼールと世界の発見」に『トロピック』の抄録版からの引用がある[Glissant 1956c: 49-50]ことから、筆者は、本文に記した通り、グリッサンはリセ時代にこの抄録版を読んだと考えている。なお、セゼールはこの講演で「共同-出生」の語も用いてクロードルに触れている（ただし、『トロピック』版ではクロードルへの言及は削除されている）。グリッサンは1952年から1953年にかけてクロードル、ルヴェルディ（Pierre Reverdy）、シャル（René Char）、セゼールを取り上げて高等研究免状（DES）論文「現代詩における世界の構想と発見」を執筆しており、1950年代前半にはクロードルに親しんでいたことはグリッサン研究における共通認識だが、セゼールの「詩と認識」を通じてすでに1940年代半ばにクロードルの詩学の一端に触れていた可能性（クロードルへの言及のない『トロピック』版にも、「詩とは、語、イメージ、神話、愛そしてユーモアによって、私を私自身と世界の生気に満ちた中心に配する手続きである」という命題[Césaire 1945: 169]など、「共同-出生」のテーマを連想させる箇所がある）は注目に値する。「詩と認識」の版による異同の詳細はアーノルド（Albert James Arnold）による校訂版の注釈を参照した[Césaire 2013: 1373-1395]。

¹³ 第Ⅰ節を振り返ると、「心理や描写の豊かさ」は、古代ギリシア以来の哲学と断絶した詩人の詩才の物差しとされていた。

いた高い野心ではなく、この呪いに含まれるロマン主義 le romantisme de cette malédiction だった。[HM: 826]

批評記事の題である「呪いの継承」が何を意味するか、ここでほぼ明らかになったと言えるだろう。グリッサンは、他者や世界との関係という観点から、ランボーを現代詩の先駆者にとらえつつ、ランボーがロマン主義の残余も抱えていたと見ている。グリッサンの考える「ロマン主義」とは、心理や描写に重きを置き、外の世界よりも内面に向かう個人主義的傾向であり、批評記事では、こうした傾向が現代詩にも受け継がれている、という批判がこの先で展開される。また、上の引用には第Ⅱ節のもう一つの主な論点である「詩的認識」という言葉が出てくるが、同節の終わりで、ランボーが望んだ詩的認識のあり方について、グリッサンは次のように想像する。

彼が望んでいた詩的認識とは、次のようなものかも知れない——人間の全ての次元が、明らかになったものも予感されたものも（〈私〉と〈他者〉、感性と認識、〈自然〉と〈歴史〉、〈孤独〉と〈関与〉……）、結びつくであろう場所として詩を試み、そうすることで、真実の定式を眩惑すること。詩はかくして人間と人間の、人間と世界の、関係の至高の弁証法となるだろう。[HM: 827]

人間の抱える様々な次元の断絶、対立を解消し総合する、世界との関係の詩、という考えがここには示されている。「詩が弁証法となる」と

いう言葉には、この批評記事の序盤で提示された古代ギリシアに始まる哲学と詩の断絶を架橋しようとするグリッサンの構想がうかがえる。

3. 「呪いの継承」第Ⅲ節：現代詩における「詩的認識」

4つの段落からなる第Ⅲ節では、現代詩についてグリッサンの見解が展開される。節の前半で主張されるのは、人間と世界の関係についての内面主義的、観念論的、個人主義的な表現という、第Ⅱ節でランボーがその残余を引きずっていたと論じられたロマン主義以前の詩の傾向は現代詩にも認められ、それが詩をめぐる混乱をもたらしている、ということである。では、グリッサンは詩が、詩の言葉がどうあるべきだと考えているのか。第3段落から引用しよう。

詩の言葉は、散乱してゆく万物に詩が対置する一体性の探求の保証であり、保証であるべきなのだ。結集の、総合の、固定の試みが、人間による探求に、したがって芸術に、必要だと認めるならば、回折し、炸裂し、真実が無限に分散してゆく世界において、詩の言葉はかつてないほど、一つの永続性に達し得ねばならない、少なくともそこに向かわねばならない、ということが直ちに認められるだろう。[HM: 828]

万物が散乱する（宇宙の無秩序の度合いが増してゆく）というイメージからは、物理学の「エントロピーの増大」¹⁴を想起することができる。この無秩序の増大に抗して結集、総合、固定を試みる（何かをかたちにして永続的に残す）のが詩などの芸術を含む人間の探求活動である、

¹⁴ エントロピー（英語 entropy）とは、ある系（システム）の複雑さの度合いを表すための熱力学的概念であり、乱雑さが増すほどエントロピーは大きくなる。外界に対して熱や物質の出入りのない孤立系においてエントロピーは不可逆的に増大する（エントロピー増大の法則）。自然界（宇宙）を孤立系とみなせばエントロピーの総和はその極大値に向かって増加することになる。平凡社『世界大百科事典』（[1988] 2009）の「エントロピー entropy」の項とコラム「【エントロピー】社会システムとエントロピー」を参照した。

とされている。また、後でも触れるが「回折」という言葉も物理学の用語であり、この一節からは当時のグリッサンがある程度の自然科学の知識を持っていたことがうかがえる。この点に関して、ヌーデルマンが著したグリッサンの伝記には、若い頃に物理や化学の教師を務めたこともある科学哲学者ガストン・バシュラールと学生時代のグリッサンとの交流が記されており、グリッサンはバシュラールの娘シュザンヌから数学を教わったという [Noudelmann 2018: 99-100]。火・水・風・大地の四元素をめぐるバシュラールの詩学がグリッサンに大きな影響を与えたことは良く知られているが、グリッサンが後年まで有していた数学や自然科学に対する関心¹⁵の背景にもバシュラールの存在があるのではないか、と筆者は考えている。

さて、第4段落でグリッサンは、第Ⅱ節の主な論点であった「詩的認識」について、その現代詩におけるあり方を次のように述べる。

だが、次のように提題することもできる——詩的認識の試みは、瞬間 *instant* への情熱から逃れつつあり、ある持続 *durée* への関心の中に含まれるようになってきている——つまり、詩編に代わって詩集へ、粗いままの言葉や「文字通り」の言葉に代わって組織された言葉へ、感性-直観に代わって感性-認識へ、常に無媒介な詩的〈イメージ〉の想像に代わって程度の差はあれ広がりを持った詩的〈リズム〉の想像へ、突然の〈運命〉に代わって媒介する〈歴史〉へ、等…… [HM: 828]

瞬間的なものから時間の持続を必要とするものへの移行という観点が提示され、それが様々に敷衍されている。こうした詩的認識のあり方

の移行について、1956年に出版された詩論のアンソロジー『詩法 *L'Art poétique*』に収められたグリッサンの文章も参照しよう。

詩人は離れる、閃きから、「啓示された」ものから、無が続く中のあの区切りから。イメージのはかない現在性の中に消える、このインスピレーションの幻想から離れ、詩人はついに身を捧げる、ある持続に、時間と空間のある集積に、そこではリズムが増大する。詩人は選び出す、世界の総体の中で、自分にとって保存すべき、歌うべき、救うべき、そして自分の歌に調和するものを。そしてリズムは儀式的な力であり、意識を持ち上げる梃子でもある。というのも、リズムは進ませるのだ、詩節から詩節へと、ある種の今日の詩の二つの力に向かって——まずは、韻律上の豊かさと厳格さ、これらは選択を（選択の正当さを）保証し、獲得したものを守る。そしてもう一つは、世界をその厚みと持続において認識すること、〈歴史〉の輝く裏面、それは人間を唯一の証人とする。つまり、詩は叙事的なものの領域に戻ってきている。[Glissant 1956a: 705-706]

「閃き」、「啓示」、「インスピレーション」等、瞬間的なものから、持続へ、時間と空間の集積（この集積は「世界」と読み替えるのではない）へ。この移行の中で、リズムの果たす役割が増す。瞬間から持続への移行が当時のグリッサンの詩論において重要なテーマだったことがわかる。そして、そこには叙事的な詩へ向かう動きが含まれている。

ここで、当時のグリッサン文学の、特に詩の展開に注目しよう。リセ時代に文芸誌『トロピッ

¹⁵ 例えば、講演集『〈多様なもの〉の詩学序説 *Introduction à une poétique du Divers*』（1996）にはカオス理論に言及した「混沌-世界：〈関係〉の美学のために」が収められている [Glissant 1996: 81-107（邦訳：113-153）]。

ク』等を通じてブルトンをはじめとするシュールレアリストやエメ・セゼールの詩に親しんでいたグリッサンは、1940年代半ばの作家活動の出発点ではこれらの詩人の影響をかなり受けていたが、1950年前後には詩風に変化が現れ、ヴェルセ (verset 一回の深い呼吸をリズムの単位とする詩の一節) の詩法によって知られるクローデルやサン＝ジョン・ペルス (Saint-John Perse) に近い作品を発表するようになってゆく¹⁶。例えば、1955年出版の詩集『揺らぎの地』には「ヴェルセ Versets」と題され、題の通りヴェルセで書かれた詩編があり、同詩集の近刊紹介 [Glissant 1955b: 4] で予告されている二つの詩作品『インド』(1956)と『黒い塩』(1960)でもヴェルセが多く用いられる。呼吸によって刻まれる息の長いリズム(リズムは時間の持続を前提とする)からなるヴェルセの多用は、瞬間(直観、イメージ、インスピレーション等)から持続への移行という詩論の、詩作における具体化と言えるだろう。また、『インド』と『黒い塩』はともにカリブ海の歴史などを題材とする叙事的な作品であり、この2書の刊行予告からは、詩論の中で「瞬間から持続への移行」が伴っていた「叙事的なもの」へ向かう動きを作品として具体化してゆくグリッサンの構想が見て取れる。以上から、「呪いの継承」第Ⅲ節の現代詩における「詩的認識」をめぐる議論は同じ時期のグリッサン詩の展開と重なっている、とすることができるだろう。さらに、ジャン＝ポール・マドゥーによる凝縮された概観によれば、グリッサンは『詩的意図』(1969)や『アンティル論 *Le Discours antillais*』(1981)などで、西洋の詩の近代性が瞬間的なものばかりを重ねることで詩と物語(物語は叙事的なものを含み、叙事的なものは持続の時間性を有する)の分離を遂行してきた、という批判を展開した

[Madou 1999]。この観点を踏まえると、「瞬間から持続への移行」のテーマは、瞬間的なものに偏重して物語と分離した西洋の現代詩に対して物語(持続的なもの)を含んだ詩(具体的には『インド』と『黒い塩』という叙事的な作品)を提出しようとするグリッサンの企てとして理解できるだろう。

ここまでが「詩的認識」を軸とする「呪いの継承」の読解である。次に、後年のグリッサン思想の萌芽がこの批評記事に認められる、ということを描しよう。

4-1. 「回折」と「炸裂」：「〈関係〉の詩学」への道筋

まず、「呪いの継承」第Ⅲ節第3段落から、現代における詩のあるべき姿を論じる次の一節を引く(本論文第3節の一つ目の引用と一部重複する)。

⁽¹⁾ 詩がますます桁外れになってゆくある対象を抱えている *la poésie embrasse un objet de plus en plus démesuré*、まさにその故に、詩が深淵の不確かな呼びかけの暗闇の中で、意図によって、失われまいということが、不可欠なのではないだろうか？ あらゆる他の自由に劣らず、言葉の自由に当てはまることだが、不用意さに基づき得るような自由は一つとして存在しない。詩の言葉は、散乱してゆく万物に詩が対置する一体性の探求の保証であり、保証であるべきなのだ。結集の、総合の、固定の試みが、人間による探求に、したがって芸術に、必要だと認めるならば、⁽²⁾ 回折し、炸裂し、真実が無限に分散してゆく世界において *dans un monde diffracté, éclaté, où les vérités s'essaient à l'infini*、詩の

¹⁶ この時期の詩風の変化については、拙論「エドゥアール・グリッサン初期作品研究——最初期の詩風の変化をめぐる(1946-55年)——」[早川 2021]で詳しくたどった。

言葉はかつてないほど、一つの永続性に達し得ねばならない、少なくともそこに向かわねばならない、ということが直ちに認められるだろう。[HM: 827-828 (下線は引用者)]

先に下線部(2)中の「回折し、炸裂した世界 un monde diffracté, éclaté」という表現に注目する。すでに触れた通り「回折 diffraction」は物理学用語で、波動が障害物に遮られたとき、その障害物の、波の進む方向に対して影となる部分にも波動が回り込んで伝わる現象である。「回折する diffracter」の語は「呪いの継承」発表の翌年に出版された『意識の太陽』にも登場する——「私は突然パリの秘密がわかる——パリは一つの島だ、至るところから受け取り、すぐさま回折する」[Glissant 1956b: 64]。フランスやヨーロッパの文化と風景をめぐる思索を含むこの作品の内容からすると、おそらくこの文には、様々な文化が波のようにパリに押し寄せ、それが他の場所に伝播してゆくイメージを読み取れると思われる。ともかく、少なくとも、島という地形と回折という波動現象がグリッサンのイメージの中で結びついていることは確かである。さらに後年のグリッサンの仕事を参照すると、「回折する」と「炸裂する éclater」の2語は、評論集『〈関係〉の詩学 *Poétique de la Relation*』(1990)の中で、〈関係〉の場所としてのカリブ海の特徴を表す言葉として用いられている。やや長くなるが、該当箇所を引用する。

私としては、関係が世界で最もはっきりと与えられる場所のひとつとして、関係がさらに強まるとされるエクラ [éclat] の地帯のひとつとして、カリブ海を挙げよう。エクラの語は、ここでは輝き éclairage と弾けること éclatement の二重の意味で考えてほしい。

この地域は、アメリカ大陸へ向かう通過の場所であると同時に、出会いの、共謀の場所であり続けてきた。私としてはカリブ海を、陸地に囲まれた内海、集中する海である地中海(この海は、ギリシア、ヘブライ、ラテンの古代に、そして後にはイスラームが登場した際に、〈一者〉の思考を課した)と比べて、こうしたあり方とは反対に、弧をなし点状の島々で炸裂する海として定義したい。回折する海。この群島としての現実、カリブ海でも、太平洋でも、〈関係〉の思考を自然と明らかにする。と言っても、そこから何らかの状況の優位を導き出す必要はない。

カリブ海で起きたこと、クレオール化という言葉で要約できるであろうことは、〈関係〉の思考について、できるだけ接近したかたちで、そのあり方を示してくれる。それは、出会い、(セガレン [Victor Segalen] 的な意味での) 衝撃、混血というだけでなく、各人が、ある場所にいながら別の場所にもおり、根づきながら開かれており、山中で迷いながら海中で自由であり、調和しながら彷徨している、こうしたあり方を可能とする、前代未聞の次元である。[Glissant 1990: 46 (邦訳: 48-49、下線は引用者)]

動詞 éclater は、弾けることと輝きという二重の意味を帯びた éclat の語を含んでいる。ここで、砂浜でも岩場でも、カリブ海の島の海岸を思い浮かべると、そこでは波が絶えず打ち寄せ、弾け、輝いている。つまり éclater は、カリブ海の風景の中で、島々の波打ち際をイメージさせる言葉である。diffracter については、『意識の太陽』の例で島と回折のイメージの結びつきを見たように、押し寄せる波が島という障害物に当たり、回り込んで広がっていく様子を想像する

と、やはりこの動詞も多島海としてのカリブ海のあり方を表していると言えるだろう。「回折し、炸裂し、真実が無限に分散する世界」とは何なのか、「呪いの継承」の中だけで考えるのは難しいが、以上の議論を踏まえると、群島としてのカリブ海のイメージがそこに潜んでいる可能性が見えてくる。

4.2. 詩の抱える桁外れの対象：〈全-世界〉への道筋

後年のグリッサン思想の萌芽として、本節の最初の引用の下線部(1)「詩がますます桁外れになってゆくある対象を抱えている la poésie embrasse un objet de plus en plus démesuré」についても論じよう。この言葉は『詩的意図』に収められた「呪いの継承」を改稿した文章の中で、次のように敷衍されている——「詩は、ますます桁外れになり、複雑で、折り込まれたある対象を抱えている(錯綜した全体性) la poésie embrasse un objet de plus en plus démesuré, complexe, impliqué (la totalité implexe)」[Glissant 1969: 59]。「呪いの継承」と表現が等しい部分「ますます桁外れになってゆくある対象 un objet de plus en plus démesuré」は、複雑で(complexe) 折り込まれている(impliqué)と補われており、「ますます桁外れで、複雑で、折り込まれている」「対象 objet」は「錯綜した全体性 la totalité implexe」という言葉で凝縮して言い換えられている。つまり、詩が抱える桁外れの対象とは、錯綜した「全体性」である。では「全体性 totalité」とは何か。この語は、後年のグリッサン思想で、詩が、そして文学が対象とする総体としての世界、という文脈で繰り返し登場する。

端的な例として評論集『〈全-世界〉論 *Traité du Tout-Monde*』(1997)の次の一節を見よう。

私は〈全-世界〉Tout-Monde と呼ぶ、交流しながら変化し持続してゆく我々の世界全体を、そして同時に、この世界について我々が持っている「ヴィジョン」を。全体性-世界 *totalité-monde*、その物理的多様性において、そしてそれが我々に抱かせる諸々の表象において。もはや、この全体性の想像へと飛び込まなければ、我々のいる唯一の場所から、全体性-世界を歌うことも、言うことも、苦心惨憺してそれに働きかけることも、我々にはできない。詩人たちはこのことをずっと予感してきた。[Glissant 1997: 176 (邦訳: 167)]

物理的実在としての世界全体とその多様性、そしてこれらについて各人の抱くイメージが複合した、全体性-世界(全体性としての世界)、つまり、実在の世界と想像された世界とが絡み合い変化し続ける〈全-世界〉。「呪いの継承」に記された「詩が抱える桁外れの対象」(＝「錯綜した全体性」)とは、こうした総体としての世界のことであり、1955年のグリッサン初の批評記事に登場したこの言葉は後年の思想の中心にある〈全-世界〉へと展開してゆく¹⁷。

結論

まず、ここまでの議論を振り返ろう。第1節(1-1.と1-2.)。「呪いの継承」の序盤でグリッサンは古代ギリシアから近代にいたる西洋における詩と哲学の関係をたどった。プラトンの「詩人追放論」以来詩と哲学の間は断絶して

¹⁷ グリッサン晩年の評論『ラマンタンの入江 *La Cohée du Lamentin*』(2005)には次の警句がある——「〈全-世界〉は、詩の最も高度な対象であり、予測不能なものでもある。その意味で、〈全-世界〉は混沌-世界である」[Glissant 2005: 37 (邦訳: 43)]。詩が〈全-世界〉を対象とするという考えがはっきりと示されており、同書の50年前に書かれた「呪いの継承」の「詩が抱える桁外れの対象」が総体としての世界(後年の用語で言えば全体性-世界、〈全-世界〉)のことであり、という筆者の読解を支持する記述である。

いたが、時代の経過とともに徐々に詩は世界の開示へと向かい、さらに近代に至り、詩と哲学の距離は縮まってゆく。こうした思想と生の全般的な動きの中で「詩的認識」の試みが可能となってくる。ランボーは詩的認識の詩人の先駆だった。第2節。批評記事の第II節は主にランボー論に充てられる。ランボーは他者や世界との関係という観点から現代詩の先駆者とみなされるが、同時にロマン主義以前の個人主義的な詩の傾向も抱えていた（「呪い」と呼ばれる様々な矛盾）。第3節。現代詩をめぐるグリッサンの見解が述べられる批評記事の第III節では、詩的認識について「瞬間から持続への移行」という論点が提示される。「呪いの継承」以外のグリッサンの著作も参照すると、この移行は、クローデルやサン＝ジョン・ペルスに代表される詩法ヴェルセを用いるようになり、カリブ海の歴史などを題材とする叙事的な詩作品を発表してゆく当時のグリッサン詩の展開と重なっている。第4節（4-1.と4-2.）。「呪いの継承」には後年のグリッサン思想の萌芽も認められる。第III節第3段落に「回折し、炸裂した世界」という言葉がある。『意識の太陽』（1956）と『〈関係〉の詩学』（1990）を参照すると、「回折する」と「炸裂する」の2語は群島としてのカリブ海のあり方を表現しており、〈関係〉の思想と強く結びついていることがわかる。また第III節第3段落には「詩がますます桁外れになってゆくある対象を抱えている」という言葉もある。『詩的意図』（1969）所収の「呪いの継承」を改稿した文章と『〈全-世界〉論』（1997）等を参照すると、詩が抱えている「ますます桁外れになってゆくある対象」とは、後年のグリッサン思想で「全体性-世界」あるいは「〈全-世界〉」と表現される、総体としての世界のことである。

以上を踏まえ、「呪いの継承」の、さらに

1955年という年のグリッサン文学における位置づけを考える。批評記事の構成を俯瞰的に見ると、第I節と第II節の議論の軸はつまるところ「詩的認識」だと言えるだろう。すでに述べたように「詩的認識」という観点は1940年代半ばのセゼールの詩論にその源流があると考えられる。「詩的認識」はリセ時代から1950年代半ばに至る作家グリッサンの形成期において重要な観点だったと言えよう。第III節で提示される「瞬間から持続への移行」については、上で見た通り当時のグリッサン詩の展開と重なっており、その意味で、1955年のグリッサンにとってこの論点は現在進行形の詩における課題であった。そして第III節では「回折と炸裂」と「詩の抱える桁外れの対象」という表現にも注目した。前者は「〈関係〉の詩学」、後者は〈全-世界〉という、グリッサン思想の中心テーマと関連しており、これらの表現には後年の思想の萌芽となるイメージが仄見える。つまり「呪いの継承」には、1940年代半ばから1990年代に至るグリッサン文学の展開が、もちろんその全てではないが、凝縮されていると言うことができる。また、「はじめに」でも触れたが、1940年代後半から1960年代前半のグリッサン文学の流れを確認すると、詩人として作家活動を開始したグリッサンは『島々の野』（1953）までカリブ海の風景を叙する詩のみを発表していたが、1954年には短い書評が雑誌に載り、1955年には「呪いの継承」等の雑誌記事とともに詩集『揺らぎの地』（やはりカリブ海の風景が題材）を出版、1956年は叙事的長編詩『インド』とエッセー『意識の太陽』を刊行し、1958年に小説第1作『レザルド川』、1960年に叙事的長編詩『黒い塩』、1961年に戯曲『ムシュー・トゥーサン』、1964年に小説第2作『第四世紀』を出版するなど¹⁸、詩については叙景から叙事

¹⁸ ここで『インド』、『レザルド川』、『黒い塩』、『ムシュー・トゥーサン』、『第四世紀』の内容を簡単に述べよう。『インド』はヨーロッパ人のアメリカ（南北アメリカとカリブ海）への航海、同地の征服、奴隷貿易、奴隷たちの反乱などを歌い、「（西）インド Les Indes (occidentales)」と呼ばれたアメリカの歴史を描く。『レザルド川』は第二次大戦後、1945年のマルティニー

へ、さらに詩からエッセーや小説、戯曲へと著作のジャンルが広がってゆく。「呪いの継承」の読解を中心とした本論文の議論も踏まえてこうした流れを見ると、1955年を初期のグリッサン文学における一つの画期とみなせるだろう。

今後の課題について述べると、その一つは、1955年だけでなく、その前後の著作を広く視野に収めて厚みのある議論を提出することである。最初の著書『島々の野』などカリブ海の風景を叙する詩人であった1950年代前半までと、文化・政治運動へ積極的に参加し著作も時代状況に応答する度合いを増してゆく1950年代後半以降、二つの時期の結節点としての1955年、という流れを丁寧に描き出し、初期グリッサン文学の理解を深める仕事を行いたい。また「呪いの継承」の読解自体についても、グリッサンのランボー論の妥当性を検討することができなかった点など、まだ不十分と考えている。グリッサンの他の著作やグリッサン以外の書き手の仕事もより広く研究し、この批評記事の理解を深めてゆきたい。

* * *

本論文は2021年10月に開催された日本フランス語フランス文学会秋季大会で行った口頭発表「1955年のエドゥアール・グリッサン——批評記事「呪いの継承 L'Héritage de la Malédiction」を中心に」の原稿を加筆修正したものである。

クを舞台に、ある若者のグループの政治活動、友情、恋愛を島の風景とともに叙した作品である。『黒い塩』では古代カルタゴ、中世フランス、アフリカ、カリブ海が、民の苦難の象徴としての「黒い塩」のイメージで結びつけられる。『ムシュー・トゥーサン』はハイチ革命の英雄トゥーサン・ルーヴェルチュール (Toussaint Louverture) を主人公としている。『第四世紀』では、『レザルド川』にも登場する島の歴史を調べる若者マティウと逃亡奴隷の子孫である呪術師の老人パパ・ロングエとの対話を通して、フランス本土の視点から書かれた公式の歴史では語られなかった、黒人奴隷たちの歴史・物語が試みられる。こうして概観すると、1950年代後半から1960年代前半のグリッサンの著作の多くが歴史を主題としていることがわかる。

【参考文献】

- Arthéron, Axel et Lauro, Rafaël, 2020, «Premiers écrits, traces obscures, textes enfouis: recherches d'une forme», Dominique Aurélia et al., *Édouard Glissant, l'éclat et l'obscur*, Point-à-Pitre: Presses universitaires des Antilles, 93-109.
- Baudot, Alain, 1993, *Bibliographie annotée d'Édouard Glissant*, Toronto: Éditions du GREF.
- Berkeley, George, [1710] 1949, *A Treatise concerning the Principles of Human Knowledge*, A. A. Luce and T. E. Jessop (edited by), *The Works of George Berkeley, Bishop of Cloyne*, vol.2. (宮武昭訳, 2018, 『人知原理論』筑摩書房.)
- Césaire, Aimé, [1945] 1978, «Poésie et connaissance», *Tropiques*, 12: 157-170, reproduction: Paris: Jean-Michel Place.
- Césaire, Aimé, 2013, *Poésie, théâtre, essais et discours*, édition critique d'Albert James Arnold, Paris: Agence universitaire de la francophonie: CNRS éditions: Présence africaine éditions.
- Claudé, Paul, [1907] 1984, *Art poétique*, édition présentée et annotée par Gilbert Gadoffre, Paris: Éditions Gallimard (collection «Poésie»). (齋藤磯雄訳, 1960, 「詩法」佐藤正彰訳者代表『世界文学大系51 クローデル／ヴァレリー』筑摩書房, 161-215.)
- Glissant, Édouard, 1955a, «L'héritage de la malédiction», *Les Lettres nouvelles*, 28: 824-829.
- Glissant, Édouard, 1955b, *La Terre inquiète*, Paris: Éditions du Dragon.
- Glissant, Édouard, 1956a, «Car le vœu du poète ...» (texte sans titre), Jacques Charpier et Pierre Seghers (sous la direction de), *L'Art poétique*, Paris: Éditions Seghers, 705-706.
- Glissant, Édouard, 1956b, *Soleil de la conscience*, Paris: Éditions Falaize.
- Glissant, Édouard, 1956c, «Aimé Césaire et la découverte du monde», *Les Lettres nouvelles*, 34: 44-54.
- Glissant, Édouard, [1956] 1994, «Les Indes», Édouard Glissant, *Poèmes complets*, Paris: Éditions Gallimard, 107-165. (恒川邦夫訳, 2012, 「インド」恒川邦夫著『《クレオール》な詩人たち I』思潮社, 242-281.)
- Glissant, Édouard, 1958, *La Lézarde*, Paris: Éditions du Seuil. (恒川邦夫訳, 2003, 『レザルド川』現代企画室.)
- Glissant, Édouard, [1960] 1994, «Le Sel noir», Édouard Glissant, *Poèmes complets*, Paris: Éditions Gallimard, 167-238. (恒川邦夫訳, 2001, 「アフリカ」(抄訳) アンヌ・ストリューヴ＝ドゥボー編『対訳 フランス語現代詩アンソロジー』思潮社, 90-101; 中村隆之・松井裕史訳, 2011, 「黒い塩」(抄訳) 『現代詩手帖』54(4), 78-83.)
- Glissant, Édouard, 1961, *Monsieur Toussaint*, Paris: Éditions du Seuil.
- Glissant, Édouard, 1964, *Le Quatrième siècle*, Paris: Éditions du Seuil. (管啓次郎訳, 2019, 『第四世紀』インスクリプト.)
- Glissant, Édouard, 1969, *L'Intention poétique*, Paris: Éditions du Seuil (collection «Pierres vives»).

- Glissant, Édouard, 1990, *Poétique de la Relation*, Paris: Éditions Gallimard. (管啓次郎訳, 2000, 『〈関係〉の詩学』インスクリプト.)
- Glissant, Édouard, 1996, *Introduction à une poétique du Divers*, Paris: Éditions Gallimard. (小野正嗣訳, 2007, 『多様なものの詩学序説』以文社.)
- Glissant, Édouard, 1997, *Traité du Tout-Monde*, Paris: Éditions Gallimard. (恒川邦夫訳, 2000, 『全-世界論』みすず書房.)
- Glissant, Édouard, 2005, *La Cohée du Lamentin*, Paris: Éditions Gallimard. (立花英裕・工藤晋・廣田郷士訳, 2019, 『ラマンタンの入江』水声社.)
- 早川卓亜, 2021, 「エドゥアール・グリッサン初期作品研究——最初期の詩風の変化をめぐって(1946-55年)——」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』66: 323-341.
- 廣田郷士, 2020, 「基本元素の考古学——エドゥアール・グリッサンの初期詩作とその変遷——」『言語情報科学 = Language and information sciences』18: 159-175.
- Jégousso, Jeanne, 2020, «L'écriture du dépassement : Édouard Glissant, critique littéraire», Dominique Aurélia et al., *Édouard Glissant, l'éclat et l'obscur*, Point-à-Pitre: Presses universitaires des Antilles, 313-320.
- Joubert, Jean-Louis, 2005, *Édouard Glissant*, Paris: adpf ministère des Affaires étrangères.
- Madou, Jean-Pol, 1999, «L'Un et le Divers: comment repenser le lyrique, l'épique, le tragique, le politique?», Jacques Chevrier (textes réunis par), *Poétiques d'Édouard Glissant*, Paris: Presses de l'Université Paris-Sorbonne, 193-202.
- 中村隆之, 2016, 『エドゥアール・グリッサン——〈全-世界〉のヴィジョン』岩波書店.
- Noudelmann, François, 2018, *Édouard Glissant: l'identité généreuse*, Paris: Éditions Flammarion.
- プラトン(藤沢令夫訳), 1979, 『国家』(上下巻)岩波書店.
- Radford, Daniel, 1982, *Edouard Glissant*, Paris: Éditions Seghers (collection «Poètes d'aujourd'hui»).
- Rimbaud, Arthur, 2009, *Œuvres complètes*, Paris: Éditions Gallimard (collection «Bibliothèque de la Pléiade»).
- Verlaine, Paul, 1888, *Les Poètes maudits*, Paris: L. Vanier. (倉方健作訳, 2019, 『呪われた詩人たち』幻戯書房.)